

# 大学生における共同体感覚と社会的行動との関連

高坂康雅 *KOSAKA Yasumasa*

- 1 — 問題と目的
- 2 — 方法
- 3 — 結果
- 4 — 考察

【要旨】本研究の目的は、大学生における共同体感覚と社会的迷惑行動及び向社会的行動との関連を検討することである。大学生436名（男子258名、女子171名、不明7名）を対象に、共同体感覚尺度（高坂, 2011）、社会的迷惑行動項目（吉田他, 1999）、向社会的行動項目（菊池, 1988）で構成された質問紙調査を実施した。その結果、共同体感覚は向社会的行動と正の相関を示す一方、「ルール・マナー違反」との正の相関もみられた。特に、共同体感覚のうち「所属感・信頼感」が「ルール・マナー違反」と関連を示した。これらの結果から、Adlerの共同体感覚に関する理論の一部は支持されたが、社会的迷惑行動との関連は支持されたとは言えず、研究方法などを含め、さらなる検討が必要であると考えられた。

## 1 — 問題と目的

共同体感覚 (*Gemeinschaftsgefühl*, Social Interest) は、Adler の個人心理学における中心的理論概念のひとつであり (Ansbacher & Ansbacher, 1956)、後期の Adler の理論は、共同体感覚を中心に展開されている。共同体感覚について Adler (1927) は、“他の人の目で見、他の人の耳で聞き、他の人の心で感じる”という言葉が共同体感覚の許容し得る定義であると述べており、共同体感覚の定義はあいまいなままにされている。そのため、Crandall (1981) は共同体感覚を“他者に対する興味と関心”と定義し、Mosak & Maniaci (1999 坂本監訳 2006) は、共同体感覚は“私たちがお互いに、そして、世界と共に持っている共感的で情緒的な絆”であると述べているように、研究者によって、共同体感覚の捉え方は様々である。

野田 (1998) は、共同体感覚そのものの定義は困難であると述べた上で、これまでの共同体感覚の議論をまとめ、共同体感覚を構成する側面を4つ示している。1つ目は、“「私は共同体の一員だ」という感覚”である「所属感」であり、2つ目は、“「共同体は私の役に立

ってくれるんだ」という感覚”である「信頼感」、3つ目は、“「私は共同体のために役に立つことができる」という感覚”である「貢献感」、4つ目は、“「私は私のことが好きだ」ということ”である「自己受容」である。高坂(2011)は野田(1998)の共同体感覚を構成する4側面をもとに、青年期の共同体感覚を測定する尺度を作成している。4側面についてそれぞれ6項目ずつを作成し、中学生及び大学生に回答を求め、その回答をもとに因子分析を行ったところ、“現在所属している集団やその成員を信頼することができている感覚”を表す「所属感・信頼感」、「現在の自分自身を肯定的に受け入れることができている感覚」を表す「自己受容」、「人に対して主体的に貢献することができている感覚」を表す「貢献感」の3因子が抽出されている。作成された共同体感覚尺度は、内的一貫性及び再検査法による信頼性も十分であることが確認されている。また、劣等感や学校適応感、心理的ストレス反応との関連を検討したところ、Adlerの理論と一致する結果が得られており、構成概念妥当性も確かめられている。その一方で、自己愛傾向との関連は、Adlerの理論とは一致せず、自己愛(自己中心性)に関するAdlerの理論が、現在の日本の青年には必ずしも当てはめることができない可能性を指摘している。

このように、十分な信頼性と妥当性が確認されている共同体感覚尺度は国内外を通して見当たらず、この共同体感覚尺度を用いることにより、Adlerの理論の現代日本における適応可能性を検証することが可能となったと言える。

岸見(2010)は、共同体感覚について、“私と他者とは相互協力関係にあるということ”であると述べている。Dreikurs(1933, 1950 野田監訳 1996)も、個人が共同体感覚をどの程度持っているかは、その人が他者と協力できるかによって明らかにされ、その協力は報酬を求めるようなものではないと述べている。菊池(1988)は向社会的行動について、(1)他者についての援助行動である、(2)外的な報酬を得ることを目的としない、(3)その行動にはコストが伴う、(4)自発的な行動である、という4条件を提示している。岸見(2010)やDreikurs(1993, 1950 野田監訳 1996)の指摘を考慮すると、共同体感覚をもっているほど、向社会的行動をすると予測される。

また、Adler(1926, 1973 岸見訳 2008)は、共同体感覚の欠如が、犯罪や非行、アルコール依存などと関わることを指摘している。Lundin(1989 前田訳 1998)も、犯罪者や非行少年は共同体感覚が不足しており、他者に関心がなく、個人的に優越するという目的のためだけに努力をすると述べている。犯罪や非行とまではいかなくとも、一般の青年において共同体感覚が不足し、自己の優越を目指す場合には、社会的迷惑行動が生じると考えられる。社会的迷惑行動とは、“行為者が自己の欲求充足を第1に考えることによって、結果として他者に不快な感情を生起させること、またはその行為”(斎藤, 1999)であり、共同体感覚が不足し、他者に関心を払わないほど、社会的迷惑行動が生起すると予測される。

以上から、本研究では、大学生を対象に、共同体感覚と向社会的行動及び社会的迷惑行動との関連を検討する。なお、本研究では、向社会的行動と社会的迷惑行動をあわせて、社会的行動と呼ぶこととする。

高坂 (2011) で作成された共同体感覚尺度は、まだ使用例が少なく、Adler の理論の妥当性が十分に検証されているとは言い難い。特に、Adler の理論では、個人の社会との関わりが重視されていることから、共同体感覚と社会的行動との関連を検討することは、Adler の理論の適応可能性検討に寄与できると考えられる。

## 2 — 方法

### 分析対象者

東京都内の大学生436名 (男子258名、女子171名、不明7名；平均年齢19.7歳、標準偏差1.4歳) を分析対象者とした。

### 調査時期・実施手続き

調査は2011年5-6月に、集団で実施した。実施の際には、調査への協力は任意であること、無記名であること、回答を拒否したり、途中で中断したりすることができること、回答を拒否したり中断したりしても、不利益は生じないことなどを、表紙に明記し、口頭でも伝えた。

### 調査内容

**共同体感覚尺度** 高坂 (2011) が作成した共同体感覚尺度を使用した。共同体感覚尺度は、「所属感・信頼感」10項目、「自己受容」6項目、「貢献感」6項目で構成されている。「現在のあなたにどの程度あてはまりますか」と教示をし、1「まったくあてはまらない」、2「あまりあてはまらない」、3「どちらともいえない」、4「ややあてはまる」、5「とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。

**社会的迷惑行動項目** 吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折 (1999) が作成した迷惑認知尺度のなかから、10項目を選定し、使用した。吉田他 (1999) の迷惑認知尺度は、「ルール・マナー違反」と「周りの人との調和を乱す行為」の2下位尺度で構成されており、一般の大学生が日常的に経験しやすいと考えられた項目各5項目、合計10項目を選定して使用した。「あなたは普段、以下の項目にある行動をどの程度しますか」という教示のもと、1「全くしない」、2「あまりしない」、3「どちらともいえない」、4「たまにする」、5「よくする」の5件法で回答を求めた。

**向社会的行動項目** 菊池 (1988) が作成した向社会的行動尺度のなかから、高坂・戸田 (2006) が選定・改変し使用した10項目のうち、高坂・戸田 (2006) の主成分分析において主成分負荷量の高かった5項目を使用した。教示文及び選択肢は、社会的迷惑行動項目と同様であった。

なお、社会的望ましさの影響を低減させるため、社会的迷惑行動項目と向社会的行動項目はランダムに並べた。

### 3 — 結果

#### 共同体感覚尺度の因子分析と得点化

共同体感覚尺度22項目について、因子数を3に指定して、最尤法・promax回転による因子分析を行ったところ、高坂(2011)と同様の3因子が抽出された(表1)。3因子で説明可能な分散の総和の割合は53.2%であった。そこで、高坂(2011)にあわせて、第1因子を「所属感・信頼感」、第2因子を「貢献感」、第3因子を「自己受容」と命名した。

各因子に.40以上の負荷量を示した項目の $\alpha$ 係数を算出したところ、「所属感・信頼感」が.88、「貢献感」が.88、「自己受容」が.91であった。いずれも十分な内的一貫性が確認されたため、各因子に.40以上の負荷量を示した項目の平均を算出し、各下位尺度得点とした。また、いずれの因子にも.40以上の負荷量を示した15A「周りの人を無闇に疑ったりは決してしない」を除いた21項目の平均を算出し、共同体感觉得点とした。

表1 共同体感覚尺度の因子パターン及び平均値(標準偏差)

項目内容	F1	F2	F3	平均値(SD)
<b>第1因子「所属感・信頼感」</b>				
4A:自分が今いるグループや集団の一員であることを実感している	.83	-.15	-.08	3.40(1.10)
13A:自分が今いるグループや集団の人たちを信頼することができる	.75	-.02	-.01	3.47(1.10)
22A:今自分がいるグループや集団に自主的に加わっている	.75	.02	.00	3.24(1.06)
14A:周囲の人との活動に積極的に参加している	.72	.05	-.05	3.05(1.11)
1A:自分から進んで人の輪の中に入ることができる	.66	-.04	.03	2.74(1.11)
2A:積極的に周囲の人と関わりをもつことができる	.63	.08	-.01	2.88(1.13)
12A:自分から進んで人との信頼関係をつくることができる	.58	.21	.08	2.95(1.12)
3A:全体的に他人を信じている	.50	.03	.03	3.00(1.10)
5A:頼りにできる人がいる	.45	.05	.03	3.89(1.10)
15A:周りの人を無闇に疑ったりは決してしない	.26	.10	.10	3.02(1.10)
<b>第2因子「貢献感」</b>				
9C:進んで人の役にたつことをすることができる	-.06	.86	.00	3.08(0.97)
20C:他人のためでも自ら進んで力を尽くすことができる	.00	.86	-.03	3.12(1.05)
10C:困っている人に対して積極的に手助けすることができる	-.08	.84	-.03	3.21(1.01)
11C:周囲の人々のために自主的に行動することができる	.08	.82	-.08	2.99(1.03)
19C:人のためになることを積極的にすることができる	.05	.78	.06	3.00(1.04)
21C:誰に対しても思いやりをもって接することができる	.09	.62	.03	3.18(1.00)
<b>第3因子「自己受容」</b>				
17B:今の自分に満足している	-.13	-.01	.85	2.57(1.20)
7B:欠点も含めて自分のことが好きだ	.04	-.10	.81	2.89(1.21)
16B:自分でも自分自身を認めることができる	.04	.00	.80	2.90(1.11)
6B:自分自身に納得している	-.04	-.01	.79	2.86(1.16)
8B:今の自分を大切にしている	.09	.03	.71	3.17(1.13)
18B:自分には何かしら誇れるものがある	.08	.17	.44	3.03(1.21)
因子間相関\得点間相関				
第1因子「所属感・信頼感」	—	.61	.37	
第2因子「貢献感」	.65	—	.32	
第3因子「自己受容」	.40	.34	—	

N=416

注) 項目番号後のアルファベットは、高坂(2011)の下位尺度項目を表している:A「所属感・信頼感」、B「自己受容」、C「貢献感」

### 社会的迷惑行動項目・向社会的行動項目の主成分分析と得点化

まず、「ルール・マナー違反」5項目について主成分分析を行ったところ、いずれの項目も第1主成分に.40以上の負荷量を示した(表2)。寄与率は42.0%であった。そこで、5項目の $\alpha$ 係数を算出したところ、.64であった。ある程度の内的一貫性が確認されたため、5項目の平均を算出し、「ルール・マナー違反」得点とした。

次に、「周囲の調和を乱す行為」5項目について主成分分析を行ったところ、いずれの項目も第1主成分に.40以上の負荷量を示した(表3)。寄与率は40.8%であった。そこで、5項目の $\alpha$ 係数を算出したところ、.62であった。ある程度の内的一貫性が確認されたため、5項目の平均を算出し、「周囲の調和を乱す行為」得点とした。

向社会的行動項目5項目についても、主成分分析を行ったところ、いずれの項目も第1主成分に.40以上の負荷量を示した(表4)。寄与率は44.1%であった。そこで、5項目の $\alpha$ 係数を算出したところ、.68であった。ある程度の内的一貫性が確認されたため、5項目の平均を算出し、向社会的行動得点とした。

### 共同体感覚3得点及び社会的行動3得点の性差の検討

高坂(2011)では、「所属感・信頼感」得点において男女差がみられていることから、本研究でも、共同体感覚3得点の性差の検討を行った。また、あわせて社会的行動3得点の

表2 「ルール・マナー違反」項目の主成分分析結果及び平均値(標準偏差)

項目内容	成分	平均値(SD)
13: タバコやゴミをポイ捨てる	.72	1.72(1.10)
11: 何時だろうが気にせず電話する	.71	1.93(1.13)
12: 図書館で声の大きさを気にしないでしゃべる	.64	1.70(0.96)
5: 授業中、授業と関係ないことを友達としゃべる	.60	2.86(1.30)
4: 駅付近で、指定された区域外に自転車やバイクを置く	.55	2.44(1.36)
成分寄与率(%)	42.0	

表3 「周囲の調和を乱す行為」項目の主成分分析結果及び平均値(標準偏差)

項目内容	成分	平均値(SD)
2: 集団で結論を出す必要があるのに、自分の意見を主張しつづける	.77	2.32(1.03)
1: 自慢話を長々する	.72	2.35(1.07)
9: 信用して話してもらったことを、他人にしゃべる	.71	2.08(1.09)
3: 狭い通路ですれ違う時に、道をゆずる素振りを見せない	.50	2.04(1.08)
10: 混雑した電車などで、他人の足を踏んでも知らない振りをする	.42	2.27(1.12)
成分寄与率(%)	40.8	

表4 向社会的行動項目の主成分分析結果及び平均値(標準偏差)

項目内容	成分	平均値(SD)
8: 見知らぬ人が何かを落とした時、教えてあげる	.69	3.84(1.02)
7: 雨降りの時、あまり親しくない友人でもカサに入れてあげる	.69	2.80(1.23)
6: 何か探している人には、こちらから声をかける	.67	2.65(1.05)
14: 気持ちの落ち込んだ友人に電話やメールをする	.66	3.12(1.18)
15: 授業を休んだ友人のために、プリントなどをもらう	.61	3.21(1.19)
成分寄与率(%)	44.1	

性差の検討も行った(表5)。

その結果、共同体感覚3得点ではいずれにおいても性差はみられなかったが、社会的行動3得点においては有意な差がみられ、「ルール・マナー違反」得点と「周囲の調和を乱す行為」得点では、男子の方が女子よりも得点が高く、向社会的行動得点では女子の方が男子よりも得点が高かった。

### 共同体感覚と社会的行動との関連

まず、共同体感觉得点と社会的行動3得点との相関を、男女別で算出した(表6)。その結果、男女ともに「ルール・マナー違反」得点との間に弱い正の相関が、「向社会的行動」との間に中程度の正の相関がみられた。

次に、共同体感覚3得点と社会的行動3得点との相関を、男女別に算出した。その際、共同体感覚3得点間にはそれぞれ弱い相関または中程度の相関があるため、共同体感覚3得点のうち2得点を統制した偏相関を算出した(表7)。その結果、男女ともに「所属感・信頼感」得点と「ルール・マナー違反」得点や「向社会的行動」得点との間に弱い正の相関がみられた。また、「貢献感」得点と「向社会的行動」得点との間にも弱い正の相関がみられた。また、男子において、「自己受容」得点と「周囲の調和を乱す行為」得点との間に弱い正の相関が、「向社会的行動」得点との間に弱い負の相関がみられた。女子では「貢献

表5 共同体感覚3得点及び社会的行動3得点の男女の比較

	男子	女子	t値(df)
所属感・信頼感	3.16(0.83)	3.27(0.70)	1.47(412.47)
貢献感	3.06(0.90)	3.17(0.75)	1.39(414.87)
自己受容	2.92(0.96)	2.89(0.86)	0.33(433)
ルール・マナー違反	2.25(0.81)	1.94(0.66)	4.34(409.64)***
調和を乱す行為	2.27(0.72)	2.14(0.62)	2.00(427)*
向社会的行動	3.01(0.80)	3.31(0.65)	4.18(408.93)***

\*  $p<.05$  \*\*\*  $p<.001$

表6 共同体感觉得点と社会的行動3得点との相関

		ルール・マナー違反	周囲の調和を乱す行為	向社会的行動
共同体感覚	男子	.14*	.10	.47***
	女子	.15*	.08	.42***

\*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$  \*\*\*  $p<.001$

表7 共同体感覚3得点と社会的行動3得点との相関

		ルール・マナー違反	周囲の調和を乱す行為	向社会的行動
所属感・信頼感	男子	.20**	.04	.20**
	女子	.24**	.04	.20*
自己受容	男子	-.02	.14*	-.13*
	女子	-.05	.09	-.02
貢献感	男子	-.07	-.05	.36***
	女子	-.06	-.17*	.31***

\*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$  \*\*\*  $p<.001$

注) 値は、共同体感覚尺度の他2得点を統制した偏相関である

感」得点と「周囲との調和を乱す行為」得点との間に弱い負の相関がみられた。

#### 4 — 考察

本研究の目的は、大学生における共同体感覚と社会的迷惑行動及び向社会的行動との関連を明らかにすることであった。

その結果、向社会的行動との関連においては、予測通り、共同体感觉得点及び「所属感・信頼感」得点や「貢献感」得点が、男女ともに、向社会的行動得点と正の相関を示した。つまり、共同体感覚のなかでも、所属している集団の成員を信頼できている感覚や他者に貢献できているという感覚がもっているほど、他者のためになるような行動をしていることが明らかとなった。また女子のみであるが、「貢献感」得点は「周囲との調和を乱す行為」得点と負の相関を示していたことから、他者に貢献できているという感覚は、周囲との調和を維持することと関わっていることも明らかとなった。これらの結果は、Adlerの指摘 (Adler, 1926, 1973 岸見訳 2008 など) を支持する結果であると考えられる。

一方、男女ともに、「所属感・信頼感」得点と「ルール・マナー違反」得点と正の相関を示した。この結果は、所属している集団の成員を信頼できている感覚をもっていると、社会的なルールやマナーを破る行動が生じることを意味しており、Adlerの理論とは反する結果である。しかし、Dreikurs (1933, 1950 野田監訳 1996) は、犯罪者の共同体感覚について、“(犯罪者は) 共犯者に対する振る舞いの中で、共同体感覚をはっきり示します。犯罪者は、しばしば自分が属する特別な集団の中で緊密な社会的関係を形成しており、この集団のために自分自身を犠牲にする準備さえできています”と述べている。つまり、個人が所属した集団が、ルールやマナーを守らない集団であった場合でも、個人はその集団において共同体感覚を発達させることがあり、その集団の規範に沿った行動をとる可能性があると考えられる。本研究の対象者は、犯罪者集団や非行集団に属するようなものではなく、一般の大学生ではあるが、社会的迷惑行動項目を選択する上で、一般の大学生が日常的に経験しやすいと考えられる項目を選んでいることから、対象者が属する友人やサークルなどの集団では、社会的迷惑行動項目のような行動をすることが黙認されていたり、誰もが行っていたりする可能性がある。この点については、社会的迷惑行動項目の再検討や、対象者が属する集団についての詳細な検討などを行う必要がある。

また、男子においてのみ、「自己受容」得点が、「周囲との調和を乱す行為」得点と正の相関を示し、「向社会的行動」得点と負の相関を示した。女子でも、「自己受容」得点は、「ルール・マナー違反」得点や「周囲との調和を乱す行為」得点と無相関であったが、「向社会的行動」得点とも無相関であった。共同体感覚尺度の3下位尺度のうち、自己受容は唯一、他者との関係ではなく、自己に関わる下位尺度であり、「自己受容」得点が高いということは、他の2下位尺度得点が高いこととは異なる意味合いをもっていると推測される。高坂 (2011) では、大学生男子において、「自己受容」得点が大学生生活不安尺度 (藤井,

1998) の 4 下位尺度得点すべてと有意な負の相関または有意傾向を示しているが、「所属感・信頼感」得点は 1 下位尺度得点と有意傾向を示したのみであり、「貢献感」得点は 4 下位尺度得点すべてと無相関であった。ここから、特に大学生男子における「自己受容」は個人の適応においては適応的な方向性をもつが、他者や社会との関係においては不適応的な方向性を有する下位尺度であると考えられる。このような自己受容の測定上の特徴については、今後も継続的な検討が求められる。

以上から、共同体感覚は全体的には、向社会的行動と正の関連を示し、社会的迷惑行動の中でもルールやマナーを破る行動とは負の関連を示していることから、Adler の理論を支持するが、下位尺度ごとにみると、一部支持しない結果もみられた。しかし、本研究では社会的行動を回答者本人による自己報告によっているため、社会的望ましさなどによってバイアスがかかっている可能性がある。共同体感覚と社会的行動との関連を検討する上では、質問紙調査だけではなく、行動観察や実験的手法を用いる必要があり、それによって Adler の理論をより確実に検証することが可能になると考えられる。

#### 《引用文献》

- Adler, A. (1927). *Psychotherapie und erziehung*. Bd. 1. Frankfurt, Germany: Fischer Taschenbush-Verlag.
- Adler, A. (1973). *Menschenkenntnis*. Frankfurt, Germany: Fischer Taschenbush-Verlag. (Original work published (1926).) (アドラー, A. 岸見一郎 (訳) (2008) . 人間知の心理学 アルテ)
- Ansbacher, H. L., & Ansbacher, R. R. (Eds.) (1956). *The individual psychology of Alfred Adler: A systematic presentation in selections from his writings*. New York: Basic Books.
- Crandall, J. E. (1981). *Theory and measurement of social interest: Empirical tests of Alfred Adler's concept*. New York: Columbia University Press.
- Dreikurs, R. (1950). *Fundamentals of Adlerian psychology*. New York: Greenberg. (Original work published (1933).) (ドライカース, R. 野田俊作 (監訳) 宮野栄 (訳) (1996) . アドラー心理学の基礎 一光社)
- 藤井義久 (1998). 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 68, 441-448.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する一向社会的行動の心理とスキルー 川島書店
- 岸見一郎 (2010). アドラー 人生を生き抜く心理学 NHK出版
- 高坂康雅 (2011). 共同体感覚尺度の作成 教育心理学研究, 59, 88-99.
- 高坂康雅・戸田弘二 (2006). 青年期における心理的自立 (II) —心理的自立尺度の作成— 北海道教育大学紀要 (教育科学編) , 56(2), 18-30.
- Lundin, R. W. (1989). *Alfred Adler's basic concepts and implications*. Muncie, IN: Accelerated Development. (ランディン, R. W. 前田憲一 (訳) (1998) . アドラー心理学入門 一光社)
- Mosak, H. H., & Maniacci, M. P. (1999). *A primer of Adlerian psychology: The analytic-behavioral-cognitive psychology of Alfred Adler*. London: Brunner Mazel. (モサック, H. H. ・マニアッチ, M. P. 坂本玲子 (監訳) キャラカー京子 (訳) (2006) . 現代に生きるアドラー心理学—分析的認知行動心理学を学ぶ— 一光社)
- 野田俊作 (1998). アドラー心理学トークンセミナー アニマ2001
- 斎藤和志 (1999). 社会的迷惑行為と社会を考慮すること 愛知淑徳大学論集, 24, 67-77.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森 久美子・石田靖彦・北折充隆 (1999). 社会的迷惑に関する研究(1) 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科) , 46, 53-73.